

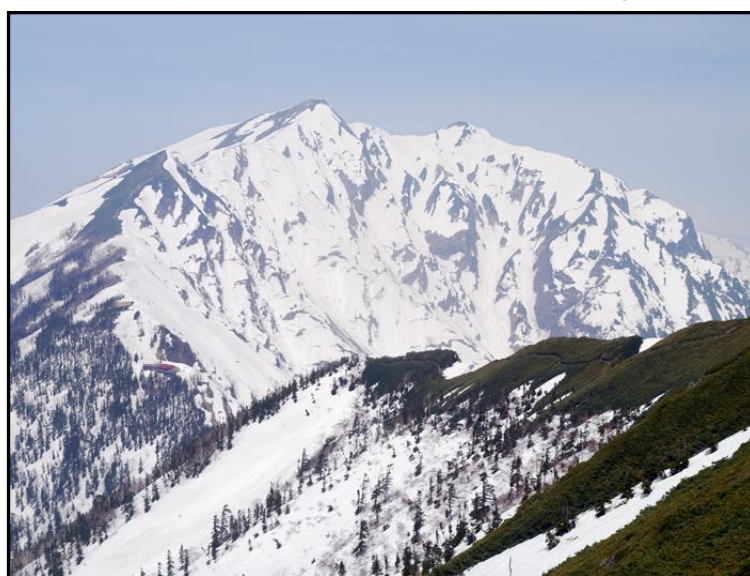
## 残雪の鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳

藤井 諭

2018年のゴールデンウィークに、長年構想を温めていた残雪の鹿島槍ヶ岳と爺ヶ岳を単独で挑戦し登頂することができたので報告する。

この時期に柏原新道は雪崩の恐れがあり通行禁止である。鹿島槍を目指して冷池へ直登する赤岩尾根はあるが急坂で危険が伴う。扇沢からだと爺ヶ岳経由しかないが、この時期の一般登山道はない。若い頃に奥多摩山岳会の冬山合宿で東尾根を登って爺ヶ岳に到達した経験があるが、十数名によるラッセルであり単独では無理なコース。そんな2年前に、ツアーの針ノ木岳・蓮華岳～種池縦走でガイドから「爺ヶ岳南尾根」のルートを教えてもらい問題が解けた。登山地図には道のないこの南尾根を多くの登山者が使い、雪崩の危険箇所なく爺ヶ岳山頂に立つそう。あとは雪の稜線をたどれば一日で冷池山荘に到達し、二日目に鹿島槍ヶ岳にアタックできそう。松江を4月29日朝に電車で出発し、この日は信濃大町に前泊した。

登山初日は晴れて気持ちよく、始発のバスに乗り扇沢に入った。扇沢駅から柏原新道に入ると、登山届のチェックがある。チェッカーは何と爺ヶ岳南尾根ルートを教えてくれたあのガイドさんだった。再会の挨拶をし、登山届を長野県のコンパスに提出したことを告げると、フリーパスで登山情報もらった。柏原新道を1時間ほど進むとケルンの手前に立入禁止のバリケードがあり、右の南尾根へ進む標識があった。



南尾根は踏み跡程度しかなく、笹竹のヤブに悩まされながら汗をかいて進む。1900mあたりから積雪1m以上の本格的な雪の斜面となり、キックステップで雪の感触を楽しみながら登り始める。ところが急な斜面で尻セードの跡！蹴り込んでもスタンスが確保できないので、止むを得ずアイゼンを着けた。長い雪渓をピッケルとアイゼンで慎重に登って行く。白沢天狗尾根とのジャンクションピークを越えると、爺ヶ岳南峰がため息が出る程遠くに聳える。2200mで雪の消えた尾根沿いの登山道となり、アイゼンを外してがガレ場を息を弾ませて登るが、GPSチェックではなかなか南峰に届かない。南尾根は予想以上に体力と時間を消耗する長い長い尾根で、爺ヶ岳南峰がとても遠く感じた。

最高峰の中峰(2670m)に立った大展望は感激だった。黒部溪谷を挟んで真正面に勇壮な劔岳と北峰稜線、そして真っ白な立山。進行方向には壮大な鹿島槍ヶ岳、振り返ると白い針ノ木岳と蓮華岳の大パノラマだ。眼下には広大な安曇野平野が人々の営みを感じさせる。ここは時間が押しているので、急ぎで冷池山荘へ向かうがここでアクシデント！冬用登山靴の右足がパッキリと開いてしまったのだ。約10年間履いていたがこのタイミングとは！あわててザックの中を探すと幸運なことにホワイトテープがあった。今まで大山などで他の登山者の応急処置などに使っていたが、今度はいよいよ自分の番だ。靴の前半分をグルグル巻にして固定するとバッチリ！

アイゼンを付けるのも問題なしで再出発する。疲れた体に山小屋は遠く、やっとたどり着いた感覚だった。連休の谷間なのか山小屋は十数名の登山者で空いていた。この日は劔岳に沈む真っ赤な夕日を撮影することができた。

二日目の朝も青空で見事に晴れた。荷物本体は小屋に置き、サブザックにピッケル、アイゼンで鹿島槍ヶ岳に向けて出発する。朝の雪面は締まり、アイゼンがキュッと効く。中間の布引山を越えると乾いた登山道となりアイゼンを外す。そして最後の山頂への登り。ついに鹿島槍ヶ岳(2889m)に登頂、じわじわと喜びが湧き上がってきた。ここで初めて前方に五竜岳と対面、2010年5月の遠見尾根からの登頂を思い出した。ここからの爺ヶ岳や針ノ木岳は低く見えるが、向かいの劔岳は厳しくて高く感じる。山頂は10人ぐらいの登山者だったが若い人が多く、自分が一番年寄りに思えた。

しかし私同様、北峰までわざわざ行く人はいなかった。この日は超ロングコースでのんびりできないため、早々に下山にかかる。山荘で再び荷物が重くなると、爺ヶ岳への登り返しがきつい。赤岩尾根の分岐で一休み、ここからの下りは僅かな足跡しかなく、短時間ではあるがやはり下りは急で危険だと思う。南峰に到着してやっと今回の登りから解放された。下りは遥か扇沢まで長大な南尾根が果てしなく続く。アイゼンをつけたり外したり、繰り返す笹竹のブッシュに悩まされ時間と体力を消耗した。ケルン下で柏原新道に出てやっと解放されたが、沢の水音が聞こえてからもゴールは遠かった。車道に出て初めて下山できた安堵感を味わった。まずスマホでコンパスに下山届を出し、大町の宿では疲れきって早々に寝てしまった。

鹿島槍ヶ岳は過去2回登ったがいずれも夏で比較的楽、今回は雪山で危険が伴い苦労したが、登頂できた喜びはより大きいものだった。写真もマイペースでたくさん撮れ、来年の写真展に何点か出せそうなので満足している。しかしこのルートは予想以上に時間と体力にリスクが伴う。冷池山荘では二泊の登山者が多かった点では、二日のピストンで余裕のない弾丸計画を反省しておきたい。下山後に強い低気圧で全国的に荒れ、白馬岳では低体温症で6人が遭難したとの報道。自分は2日とも天候に恵まれて、幸運であったことを忘れてはならないと思った。